



織田信長 1534-1582

ODA NOBUNAGA

言わずと知れた尾張国出身の武将。一般的に性格は、厳格で常人とは異なる感性を持ち、先見性や行動力に長けていたと言われている。八重姫から見れば、信長は祖父にあたる。



土方雄氏 1583-1638

HIZIKATA KATSUZI

父である雄久とともに戦国の世を駆け回った武将。関ヶ原の合戦の功績により徳川家康から伊勢一万石と近江二千石を拝領し、菰野藩を創設した。

関連する部分を紐解き、今回のマンガの題材となるストーリーを構築していきました。八重姫は、慶長6年(1601年)に菰野藩に入り、初代藩主の土方雄氏と結婚しました。雄氏は江戸や戦場に出ることが多く、菰野藩が藩主不在となる間、八重姫が菰野藩の政務を取り仕切りました。元和元年(1615年)に雄氏が大阪夏の陣の後、京都の別邸に移り住むと、病弱だった2代藩主の土方雄高

菰野藩を支えた賢夫人「八重姫」

マンガ用設定ストーリー

八重姫は、織田信長の次男である織田信雄の娘で信長の孫娘にあたり、八重姫が4歳の頃に当時8歳でのちの菰野藩初代藩主「土方雄氏」と婚姻が決まっていた。

八重姫が14歳になると信長譲りの気位の高さと気性の激しさを兼ね備えた清く美しい女性へと成長していました。ある時、八重姫は江戸から数人の家老を従えて、雄氏の待つ菰野藩に移住することとなりました。

道中の箱根の関所にて、ある家老が八重姫一団の通行手形を忘れてしまい、関所の役人に止められてしまいました。家老が身分を示す品々を見せるも、役人は首を縦に振らず、家老は諦めかけていました。すると、八重姫は付き人に持たせた薙刀を取り、役人の首を目掛けて、一閃、その薙刀を振りかざしました。役人に対して微塵も畏れないその風貌と織田家の家紋を呈した薙刀を見た役人は頭を下げ、八重姫一団は関所を通してもらえました。通行手形を忘れた家老は、八重姫の前で切腹し、許しを請うつもりでしたが、八重姫は罪に問うことなく、その後も自分に精進して仕えてほしいと家老の同行を許しました。

菰野藩についた八重姫は、家老や領民などの身分の差に隔たりなく接し、領民にも慕われながら菰野藩を支えていくこととなりました。

の藩政を支え、雄高の死後は14歳の若さで3代藩主となった土方雄豊を支え、土方家の藩主3代を見守ったといえます。青年期は「奈於の方」(出家して仏門に入った後「玉雄院」と名乗り、延宝7

年(1679年)に92歳の生涯を閉じるまで菰野藩に寄り添いました。死後は、土方家の菩提寺である菰野第三区の見性寺に葬られ、土方家の墓とともに玉雄院の墓が現在も残っています。



正眼寺の菰野藩主土方家寄進涅槃図

菰野町指定 有形文化財

菰野第一区の正眼寺にある涅槃図は、寛永8年(1631年)に雄高の生来病弱な身体を案じて正眼寺の薬師如来のご加護を受けるため八重姫と住民たちが寄進したものです。



▲町内の郷土史に精通されている方や図書館職員らで構成する菰野町偉人マンガ制作実行委員会。実行委員会での検討を重ね、ストーリーを構築していきました。

皆 さんとはかつての菰野藩を支えた女性「八重姫」の存在を知っていますか。八重姫は織田信長の次男織田信雄の娘であり、織田信長の孫にあたる女性です。初代菰野藩主、土方雄氏の妻となり、3代にわたって菰野藩を支えたと言われています。菰野町では令和4年度、ふるさとへの偉人を通じて、郷土や未来の展望を考える

マンガで辿る八重姫の一生

特集 菰野町偉人マンガ

八重姫伝

YAEHIME-DEN

菰野町のかつての偉人を

菰野町の漫画家が描きあげ

現代の子どもたちへと伝える

マンガを通じて偉人の一生を辿る

「菰野町偉人マンガ八重姫伝」

一年間の制作期間を経て 堂々完成

八重姫の一生を紐解く

初 代菰野藩主、土方雄氏の妻である八重姫ですが、歴史

的な資料はほとんど残っていません。肖像画はおろか、その功績を記した資料も少なく、偉人マンガの制作を開始するためにまず始めなければならなかったことは、資料の収集でした。町内や菰野町図書館内にある郷土資料コーナーに残る文献などの中から八重姫に

八重姫

1588-1679

YAEHIME

八重姫は、菰野藩初代藩主「土方雄氏」の正室で、織田信長の次男である織田信雄の娘であり、信長譲りの気品や器量と人望の厚さから領民に慕われていました。八重姫は、女性ながらも菰野藩の初代藩主から3代藩主までの三代にわたって支え、92歳という天寿を全うするまで、菰野藩の藩政に尽くしました。祖父織田信長の焼き討ちなどにより荒廃した寺や町の復興などにも尽力し、戦国を生き抜いた賢夫人とも言われています。



▲見性寺にある土方家の墓の脇にひっそりとたたずむ玉雄院の墓

